

## 書 評 Book Review

□ 米倉 浩 司：新維管束植物分類表 Koji YONEKURA: Updated Syllabus of Vascular Plant Families Based on Phylogeny-based System with List of Genera for Japanese Users. A5 変 型 版. 357 pp. 2019. 北隆館. ¥3000 + 税. ISBN978-4-8326-1008-8 C3045.

DNA の塩基配列情報を用いた分子系統学の進展によって植物間の系統関係を高い精度で推定することができるようになり、その成果を反映した体系化は、従来の形態等の比較類推に基礎を置いた分類体系に比べ関連分野で高い支持を得ている。

また、分子系統学の近年の進展には著しいものがあり、2010 年代以降には最初期に著された体系の改正や新たな提唱が次々と出版された。

著者は 2013 年に『日本維管束植物分類表』を出版しており、本書はその骨子となる体系の改訂版といえる。前書が準拠した Christenhusz et al. (2011a) (シダ), Christenhusz et al. (2011b) (裸子), そして被子植物での APG III 線形配列版 (Haston et al. 2009) に代って、本書ではシダは Pteridophyte Phylogeny Group (2016) による PPG, 裸子は前書と同じ Christenhusz et al. (2011b), 被子植物を Angiosperm Phylogeny Group (2016) による APG IV に依拠したものになっている。

目下急速に研究が進展している途上に、敢えて

本書のような分類表をまとめ上梓する意義を疑問視する見方もある。しかし、著者も述べているように維管束植物の分子系統学は、科のレベル以上の位置決定などを巡る研究は一段落した感がある。こうしたことから、今後研究は科間から科内を中心とした解析へと重点が移り、対象の遺伝子領域や種類、解析法等が分類群により異なる多様なものになる可能性もある。そのため、維管束植物全体を対象としてまとめられた最新の分類体系 APG IV は、植物の多様性の体系的あるいは包括的な俯瞰のみならず今後の系統分類学的研究への指針としても十分意義が認められるであろう。その意味でも本書では、かなりの科について日本産植物を中心としたものとはいえ、亜科や連、亜連への分類とその系統上の評価等が、著者の見解も含めて記されていて参考になる。

かつて前世紀に Engler 等の分類体系を学び、地域植物相や植生、医薬農林学、文化史等の立場から、材料や調査対象の植物の属する科名を知る目的で本書を手にした読者は、すでに既存の APG II や III でかなり免疫ができたとはいえ、新たな分類体系との間にあるギャップに驚くにちがいない。しかし、多少の改訂はあるにせよ今後しばらくは、本書が紹介する体系は、維管束植物の分類体系として広範囲で使用、または議論の中心に置かれるものになるであろう。その意味でも本書には深い意義が認められ、上梓は時宜を得たものといつてよい。 (大場秀章 Hideaki OHBA)